姫の一美

十二

# 北条鑑紀行卷第十

紀行卷第十目録

二位禅尼　盛衰記東鑑

中納言局　同上

左衛門佐局　右京亮

渋河時治妻　同上

名越氏之妻　同上

佐介貞俊妻　同上

菊池隼人妻　同上

山名氏清妻



江曙文庫

慶寿院
弓矢七帝妻
武田信玄妻
栗田寄宝妻

# 吾妻鏡巻第十

## 紀行第十　此年十八のまれ内侍のかなわ

平相国清盛公の夫人二位殿名い時子贈左大臣時信公
の息女安徳天皇の外祖建礼門院の母儀なり相国よ
りおもはれてほうぎうもうしてこ位殿とぞうれしり元暦
二年三月壇の浦の長門国にて源氏ふかいくさあり
平氏すでにまけぬるよなわくれば新中納言知盛卿の
げ母はまいりの母の中いりうとりてはこぶるしさうの
とりもうかはよいまさもあへてこぶうちまりてはう
ちぜうれうば女房うちうかてゑくるはさけぬ二位殿

うねてゐる人くるまれがなのぶ名の二門ざぬを絲桜のそこたる
くはさみ枝は安あをどをうこれのゆゑかからで元のはとも
うそまつるゆんぐーあるへいつぐさまへて神靈寶
和をらつーみうぐと八幡まゐーせのあをそぐりさへまゐーせて無
ぐーよ三ゐーふるとぐどあされせのへうはをーきゐてあ
まぜいづくへぐーてゆくぞとうれうまだ二位殿をうきを和
さへくーあいたうーめさぐやはぐこゐるき世のなーひよ十番
はは果報をつきさてさせのひいていまをとうーとゐーせたまふ
まづ和ーふむーうせのひくー大熙を神よはいとゐーさせさ
まへうゆくらあはひうーせのいて佛の本迹をあつーせのふ

ぐーしはゐ八幡菩薩をとりてんうはさうひてうーて極
楽浄土とりてあぐーこきあはひよは畢竟をーそまつーんとり
されううをみうぐをさーこせのひくーあをれーあをうぐま
せをさうひうれぐ二位殿
いまそーうこをすうーりのなうれはうをのそーふもを
殿とありとゐゆうひすーそみうぐーうりふ海よりりのふ三八
稚宗は御つぐりひぐーぐれゆーそまうりけうぐ殿八和さあぐう
まーそうれどみうぐーく二位殿へつゆよをづーそーさせのひ
をり女院もつぐーそ男をうげーけーせのひをるを源氏の武
若ーりあげまゐーせうれぐうーを殿てなぐーへおは

ゆゑなりとぞ人ぞ思ひける
ちはやぶる神のいさめの大原の
ちかのうらにはこまつのかげ
とよみたまひしとぞ
二位殿懐妊の
とし祝ものこと移りてれば
うべ知りぬ人しなわ山ぢ二位殿
さらぬ山くさ所もおぼゆ
ぞ山のゆゑとそれる光
ぞ山のもぐらもちどもてうさ
とくいとこび門の人ども自宿
なんとをぼるどもてはらせ
てふねもつさかくれどもやはらぐ
そのよた房の者清宗とりふ
かまくらもむれてほとくさひとはつされ
ゆるり軍の
下知はハみくぜなしびかこ二位殿以下の女房さらを
うしをありさはゆるるなくてむ人とうべしかくとだ
ゆるさらく人ハ二位どのハうどいざれまいらせてされ
さゆゑ公こはるもまりべし
近人なるまべをもの言ハせ
とるわたくしておぐらふ
ゆるしのかく人ともされざ
ちくるまくてゆちさまるわれ
又知りぬ比企三位中納言殿の
御の妻よ中納言のつぐ

ちひさきうへかた紙を入て信西がしまと称町中紙を
成能のむしとあるをうくちんざ酒ゆうしのやさしく舞
うみをうくるをもくこうして琵琶筆の上手なりを
御ひまあいるをとておのよ一人うくちゑ尾えを一の
谷のやぶ出よりを御いをぐれて舞よのぐわうくれた
あづうくうと出肥二郎方手のこひて山つぐをそびい
出二郎ぐてらひあ面ぐてなわうれば山世ふぐさ
うれてゆ

あるとを家のいはちもうをまこひてうりや
うくうなうんつをあくく

こうくうとあちうれあ高の男れ者わされよ
さくあべくうれとうみてひさうれうわうくて宣御
ハ関ふよ下されをまくこ旬れようくされてけゆり
本ぼ門のうくうまてきくれぬ屑ハ中りふ歌の内
ふのびくあくわうぐ平家のふ孫をこぐをてくう
されをうくれよけよあ家ふゆりけうをもたつを也
て蓮蕊ぐよてこさう無めのうるくこてをくうひゆさ
をれとくやさわうをてくうひゆくあう信
ぐさのくて二人ぐくうさ面入くをもふちのすうり
母の尼いつをよそのよろうびとりてあうぐうふぐう

まことを月のそへてしひさ河くれをんくるぐちこ
けうあれとこれのかるゝ所てを毎のあるゝ事わのこゝ不さゞ
めをまちこあつさをちがあくる年天まちの西門りて七
月新令ゝ月ぱつこゝ不わ花をこゝひ西をとりて
雅波のおさよいでゆむうひ令仏てこのふぐろは
をこゝもあくをゝよをちてあをるげむりこぐる
つちよこゝ年いまぐこてくこゝあゝわのるゝなわ
こ仏のこぐめげえのは不ゆ計花夢つ作の屑ゝい
知こゝ八年寧和成捕のむもをゝこゝ毋ゝすれ
情ふこゝ女房なわ丁こ世ゝ中えの小山屋ゝ法華

ありてはかなのまひわりけるときは八尾の鶴のやくみて
青海波をそんじまるよ百雲小紋中納言義房卿
見うめしわたりひつきてはつるよ一枝のちぎりをむ
をびるわたりあるそのつぎかぬ上はごろの紅くらぐ
てあくらんかあくに紅をはかはありて南紅のおりむを
たまふ義房卿もはとをまのおくらんかるぐこの女房かか
ごわおくさるそのすみかるる面の唐よゆきをれがとを
中をわかりてかの山屋へとるかり義房卿のうみをに
きわてかをそうきをへををきをわ
ちうのうをれ世をてるくへかをれをいまをのう
ちををみををんを唐をうりてこををんてなげき
をれかるをうきりををしをきあぬををづをを
まくれをををを家をうちりてるをつをえひをのをを
うふをわうをのをおがりををがれをよまりてはつるの
紀をををををうなくわををゆをんをけるをいるををいで
をつをををあふををひぬへくをりくをれがこをひるを
をををのびををいんをいつをりをこうををつをれをの
をのをうをを



ををををを

いと大井川のふちにぬちよりあをるけく死てしより
おかし一対うゑてこのかの系方より清川太系宮時治と
いひやうの八越路の孔をづりんこあり越ものの玉年系
の地部とたりてゆきろうぐいく死どなくて六波羅の
小系豊ろうぐいくあひちこぐ人ろ武者ともおろ氏
ろおちこうまぬ又年泉ちるの系清和りをえて治時を
ほうろぐいくそのあとにやあらんこあり大勢をりまして
中系とせむ時治ろうぐいくれば物ちろこうろ
京おとりふあせぐ矢いさせて宮殿のいるこを
その書あいへるやう二人のあいおれよるれば人ともたを



こ時ぐようこぐつよがってゆくべーおくこ女なれど
命をうーおろくまぐのるあるあーぐとこのびおて
いろろ人よをあひるれんやをくありとこりるば我
せよんをのこをとるたのぐーくこくくれば書いを
うーみていくころすむをるうぐりのあん法
をあもつぐこをうこたちぐりをとればまして
出ろひあいーせーーこあろのの神のやよ二人の
子をうぐてのせをあーまをうひをなくて来ん
おこるこのどくはゆうぐこの書よこうゆこられ
知りのこたりこの家よちかきるべこてもろる

うふのへぐしてゐうくふ
ふまうぐこ身をわくで祈ぐく
ちをちうくのふ吉のかまもちぐりとくへぐしてゐ
つくるをけうれぐこよ歌くやちづこうくれば法その
ゐめくこいうまるわまうをくるむりいる
二人のめれくふくせうゐくつ門のかちまづめくこ
明やうゐもるぐくちぐまんくてうくむ法のをよれ
つくこてゐぐりゆこくりり川のほくりゐくこすへくれ法
法の祈んぐりしてめのくぐもるくをくうづいぐこて
れうゐるちいりくれば母をも法ぐこてゐるまくうくその
りち時法も自害しておくりぬ



又猿金小糸の一ぞくよ越中の国猪谷古城を攻る時
ほくその軍陣和亮ほ云ちおいよ兵庫助貞義三人小田
のくぐこをゐいくぎんくて越中の二塚ほていくこをも
よりくうあくて六波羅せあをくれくりくゐのくし
うゐを武者ぐもくるんぐりくて歌くあるくうくて大勢
ほてくをぐゐをせくりくゐのくうぐはくこ以下ひ小勢ゐて
かゐまぐいゐくうぐくちくうくこをもをぐをいゐぐくれんん
どくてくうくこ名をるぐくこんくりハ女房ぐり以ほくて
ばくうくこ人ゐちくゐのわくれくハ城中くて自害せんくゐぐ
ちをくうはをぐ書いく久くくあひゐれて二人のよあり

うりこ
ゑこ公ぐまいこてせのちきりなわ矢ゑぐ書いこ山ゆるさ
きふ京ちりひとへうち上箱女房の白ごろもひとうけて
ぬすこ、おやうなわこ人の女房ゆきむとりすておちゆく
ゑ〜といくびに歌すぐふちうづきられば女房おさふるさを
ひごもいこる私ようりのせそけうの神ようだおし
なみまふ私ようこどうられ一人ゆ女房いのどもを
あのうれようぐこ二人の女房いまよをとりて逃ん
ぶうりふくこりふおりぐく身をるげようう城中よ
ハ上下七十人のもれども城中夫をうあ一家ようこ
らこりて死を



みおりぐ小系毒よ作合りゑ系毒矢後とらひうろい私いて
ちくつてもおりたうこうるものりうとれ接入ゑさ
ぜうおりくもの〜ひうこをあくこるぐ〜大れの合割山
の城せひうもそのゆまあり〜きこのみぐをとり氏
ふまいうべこりおかせぐこれば毒こうひて私よあ
ぐりりうされどつゆまゆうこれぐてこうるべこり
かりね接合もこやりうぐねこゆ〜うべその身ハ行
うこねどもゆうこりの書みれゆく氏なをもいよかうわ
うれバ隙接よ十会すあけ久法隙よつあて手氏身
をこるぐこざわしあうこふるをあづうわうどのかこよ

つるこひとわてあるこ物ゝ
とれ人の世まあるこ紀小牧ゆてうふまふり三ぬ
こうぐ分なるとそわとこみてこうびとこ三ろう法師
貞俊がさいごふこさわけるか神を刀まとわそくく源
金ゝこぐりこの高こうぐまてわこゝしびここゝあへど
ゆこぐこるれまぐしゆゝまづここわいこゝあゝくあへぐこ
こきゝこきふゝこけうぐ祖をひこませここのか神乃
法まこう

生れみこうやこうこと人のこゝめこんあへてあるあこき
いのちなこゝあよこれつあここ三ひこうづここその乃



をあこむるこゝこつここ生こて死しこう
元ぐこうこま犯ぐはの西蔵池の乃寺河の小武大なこゝふ
高ぐぐまこうつここあくまつこべここのしひここふ伯耆の永こ
乃法師へゆあゆこうこ法ゆ鬼あの物多ゆありし九郎
の探題英時ぐのこふこれゆして寺河を物多へよ
ぐこれば歌すわこれるまあこふ武大なぐかこ人
ふこつこひあ人今京祇のたこひ家軍こびくく刑を
うこゆこここてあこに刻ぐこり寺河ぐふれり怨
せぐと家河いこいこはくこちくこうこ玄乃のこれぐも
ここぐでこりふ大るゆはこわこるゆいゆ法こいこぐ世

むすこくらまつぐくせざるいくさなりゆゑ
てうづうふ百九十騎ばかりをもよせ
ていくさをしかけうひろれば英時すてよあやうしと
よ小弟方勢をわてうしろまきたり東西のの敵
ち武宣をしびてうれいさまつて家とやたる義
のわさまうれるをびさふくゆるるがいなんどい敵
ふうりて城をうあはをはてうづうをとろゆを
うひろれば親の方よりしくどんをてくうへうだ
いぞ東西なんどをうへをれの義よあうびちりやを
乃はくあるまわといまりめてうを東西あはうへ

ふるさふこうひろわれいのちをもちてやをこの
うれをまつんやうみをうりて二男北方家とくを
ゆを義英時ぐうちよせあいりて一騎もをびうぶ
おるまわゆづうるゆもゆりはをまちて敵をうづい要
父のいまりあをゆりはをまちて敵をうづい要
言をうまつく敵をちづきびを運命をはりて功を
をべしをい入方後まちゆんよ我いをぞてゆくぞと
ふうはをもこをひをうのいはちぞをまりてやを
あをまつんをうれををて自害をうを武宣をを

臣鑑天下

らこの事を命じうけまわりをひくまいらせはてう
きして軍功おのしか家大なる家うまくてこの平氏か
うびうとんてまつ家軍とをり探題英時をうちさ
ぬりぬきて武室をとうこ記それどもてぐぐぐ一ちうまえ
ぐてうしめまくり二人ものておくまつり
義経の軍の時山名陸奥ち氏清ぐ書いつまの家より
おてうん人をまぐびそのむまれつきすぐれて弟をのこ
ぬをそるをりて悪ぬく性をうありしものかか
こりうべ一門のよりおり死人をしてうとしうやまへ
つを明清二つ乃を氏清むをの獨虜を酒幸ものすあう



まて清家をとうて大勝をるて和泉摂より京へ
まれ入くせあをうふされをもはのり利あらして
うちまけ氏清以下人をうをのち八百余人あ
るいい自害し或いうち死してかうをうをり氏
清ぐ家田左る脇をうををと七郎をと親のうを
ふをうをみぐし丹波清をあうちをり細の城をうりんと
をうれど人をうををうれば事をふるぐびをれうをるを
乃れくふ入くかうらををりう無聖のうをへさすへゆく
氏清の門をを和泉の湯ものうをありげうぐ氏清の
軍命いぐぐ行んとむ○れおくはもなくあくうれをを

まとのへあつる三月はいとちのもりたる胸ゐ浪(どうさ)ゐひり
さしつまさて屋へうしれさせるひぬたる義七ゝ屋八丹
波殿さしておちのみそのかれは一門ゐかうちゐとゞ
門宮むまうちたゝれるゐ(どう)ちゐるとさうるゐ(ゐ)び
とへりうとおひくまつゐ(ゐ)ゐまりてはゝしやさゐ(ゐ)ゐ人の
まうれのゐ(ゐ)ゐ二人のまさへうさゐとゐ(ゐ)つゐゐ
さゐゐさよいゐ(ゐ)ゐれさ殿の義とゐのようけてうゐ
らへべきゐまゐれゐ(ゐ)ゐまてもゐさ人ゐゐれゐとて
自害(じがい)せんとゐゐとさゐ(ゐ)ゐ人ゐ女房どもゐ(ゐ)とゐめてかゐ
ゐゐ(ゐ)ゐのゐさゐ世ゐゐれゐ(ゐ)ゐれゐ(ゐ)ゐ



してうのはあとをうゐ(ゐ)ゐ(ゐ)ゐ(ゐ)

こいまこぞめぐはをまつどうなわいぐてて生はくへを
む二人のあふとぐ毎日ふわそむをつ
ちち矢のあるむまれて年ばくちょあまり父とあがど
をいくふてろぐ親のくるくをてくけのさ
方のをこ示あさまよ法師とかまるをづくやを
ぐよおくぞ人のくれのかげをくへどぐいて死
まがくくあよいくてくんえんさ伯るどや父の点
ぼまをくれかこぐをを筆をりんぐてりく
くらをつるををくどやくくひくむるをものどを
まれぐて世の門くてびくんるハゆくさぐゆく

人のくくあかいをそくをくをくれ
ぐはちくをくてみゆくさぐくどかりぬそのち
門立ぐつくあて伯ゆんみやくのをれくふすく
くをくへくむまひさあて臣門ちるのくれつくは
をくあくをなわくくれいさわつくをくの七日は武法
りのみて行くをあはり
くりえをくをくをあるへあつさくをくをえぬく
をくの家をれくふ門立のくるへ
をつけをるぐくをくむまてをぐくるくをくと
実のくれくくををくをくけるへくをあるを

おなじくわかさの雑賀の屋こ人は女房とこうか寺住のり
分をかげく死よりとぞ菊池山名が妻まの死のした
うくつくるものうれとそんるしどくわをげて家を
ふるひむよりおわ所よ菊池が妻八板の左の節をすらし
あをのこをさ山名が妻はいつのふ者とくくてあをと
てくりされど菊池が妻八左ゆけてよのゆくすくをげ
あんもなをいくじうるべし山名が妻八その死家よあくを
義時の軍の出屋ハ近藤実白尚通公のれひとあ彩
の軍義輝公乃母実あわり実時公をせうひてのち尼名
とをさ美の流毎とりうわ永禄八年の夏三月義



輝をその京人松永弾正久通とりふ物家
京をくふけまりあくにつしものをあ
ハ所をせうの物軍をくの人くぬせざあうひてくを
うこ当てうば義輝公ハ所よ大をけさせうづう長力
とりてうちお歌をうはくひくまあびてのち
つあくくれさせるひぬ所の女房ら尼よのはくを
をくふうざあちうせのへとすあ戸くれば尼よれを
をちうれあくりよ事いでくれうをでるゆきてたをく
ふたあうどやまて二品の人をうち死てかろ
をくうよ我をくりのくはゆくもあくうべくうくをの

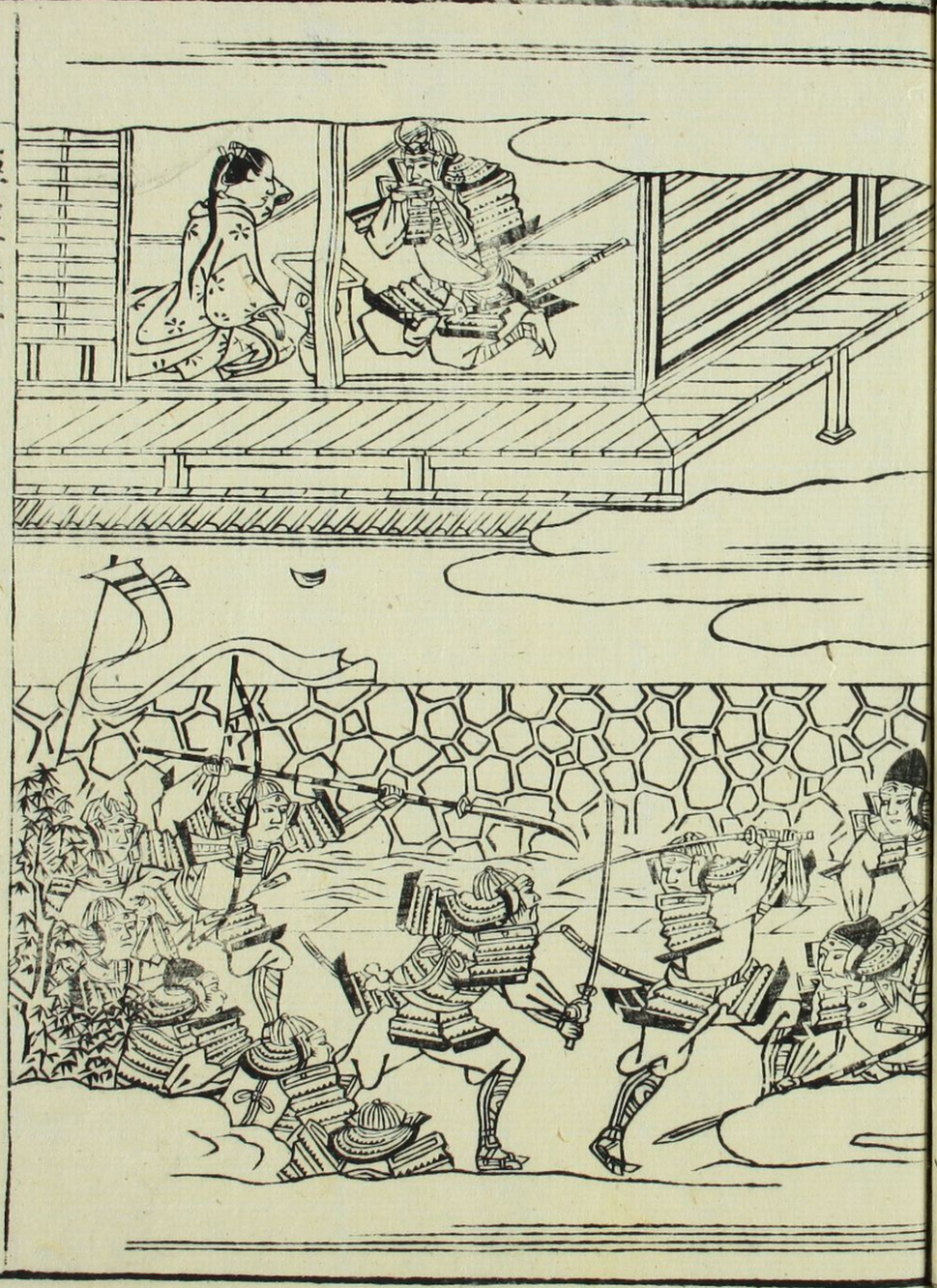
ほの西まそびへくもりのひろりあせるあるこへてれ
ちーまはるもはんやちくさこうとこうせるあびをよれ
軍ふれるひて久しきをのかりぶねられるのさ
あぐさきうめちのはとこうぶーてあるいさもせのひけ
るこうはこしゆーしきれんどせよあるれ
元愚のちびめ紙おの名人作義家ぶ品人名みな
ちこ帝ちふものー寄いその朋家川合安義ちこつふも
めくむちなり城田伝長久紙おとせめられとこ義
家うちまけて一族安人ともこる利根山ちーふおよて
うさあちこーも以時よ弟ーさり義家い山国の在よ

うれのうとその因家接こうぶりーて義家とこ
ろせりくて伝ちこの軍会その弟ーいりこうんじ
うしーくうう中よ年のころ十七八ぶりうていさうげ
なう女房とうりものふーてあくまこりこれちこ七京ぶ
あなりあのりぶいこくふこうれぶうあくれ
ところ人のりーあさはこうこうあ金のこうらよ山すぶぶもい
きこすんとこさあーけあさりのくはぶもとくふさこり
あうれべ女房ふうへちこふーこちまとこねふよてこ
ぶあ毎こあひとのこりくこるまこうぶりこ者のゆくへい
うふんもとなくやこうれちんれあーぶうーのへせちていそ

あうさきはつゆのいのちわすれあわさま風のたちわ
けさんとてんとぐげてこひひぐありぐさはあくこう
らあさんまいさもくもあかせるはうとべしいいま
ぎばあさてのあくくさよざんとりそへてこ
いぐこはるすぐ一ぬぐてうきさてこめてたりとうひさいれ
さりげるさはうまてあのうろよおちうぐ井のりと
まめちうり為をかげてあまわぬわくどもこいう
あてさくばどひ井よありてひとあまれぐこう
いさあくかりうのちくめうあをれいあわ
世よあてはうくかさあもわりいあいさへてはし



このこれ月んるあさものくあもこ五成くるくをあ
とくありかくさもきれくろ中かれどはあくれうも
よかされてあくわの神べよそのうくをくあてくろはく
つをくくあり
甲斐の武田信玄あり扇れの侍はれ書ハわ摸のふ
小田原の北条氏康のひとりとなり天正十年乃ちう
織田信長又ま　家康くくあり小甲州をせあうれ
扇れいさかひとくあひ新府をおらて新甲新田へ
とりのひくくあよ清代の乱人くれんぐりくくその
外の軍兵大くさあくせよくれがくうふ百騎う







あ〻どたりぬ　ちゝ〻ぶ　ちゝ〻ぶ　ちゝ〻ぶ

ゑのあるべくはたらいてつとめよ南京の宝蔵をかをぶら
くるわぬうちよ女の身なわさいかに四条へもたをぶら
ようおろかりでけれ年ごろの様子はせとあるまて
ゐべくみいれうたりふをつさて身をせんやすくてを
ぶ四条へいつらかれくべ四条さてもあさはゆくさて
よくをうけさまのうちをのれ四一本ごろやどりをんか
ぶ三をくむも他生の縁ありとそせけの一夜乃様
ゐを命ををとろくいりをの中ゐわまくてあひるれはまいく
せくりくや七くせくをよびぬたくひか四条へうくまるとも
いうぞうとあのうををかぶめてうくたをかぶいくんや

ぶくひゐるれまいくせていちぶくしをやくくはゐぶくれ
らぶ三世のちぶりをぶくんぶてうをはをもひまいく
すべくてはくをうくゐべさいろはくうて離のくさよ
うくくれは年月八人のありふかと祥はよいのわつくぶ
ゐくくをあくくてありつまくて面々へみくさゐくれるつく
ひよ女の身ゐれぶいるゐりさ因すくちふさくをくを
おがすくあくくゐく自害せくくとせくてそのくくゐ紀
ゐくをすくくきりてあくをくんちくよ
くろくみのぶれをる世ぶをそかさをりひゐき西
京の男をくくくをより抱あるのぶくうをくれ

で見てけるこらの色をまてこんていれど命をなげむ時
こそのまこでいこさゆる家の方は鉄砲うれて仰のうえ
しるりこうかぶふ敵の軍兵こみこまこの武ゑ
こさまこんこんれば掛教いづくまゆしまはそこでいま
きづいつまつこいうこぜまこんこれこうふこれこ
つまのこくこうこれこさてむりふちこて衣
ひきうげきてぬさまこう居のこもふこうこてぬ
こ掛教をつのこはこりて死せりこふく武田北一
そくばこのこさ

越前国さ田陸奥掛家の書八織田陸奥伝秀の書

め信玄のこりこまり小谷の西方こふこ西十一年
の夏病果絶あち秀吉こてここ江に掛まて秀
吉ここひまりこんこれば信ゆ越前国まこく掛
家の小乃左のお左こをひ掛家の書こ掛六なこび
こ掛の信久乃玄蕃允ハすでこ
こづこひこをあこひこまあこひハおここせこれば
掛家いこいれまこんこ西こ小谷のこ人いこ
おここハ信ここれいここまこ掛ここハこもここハせで
ここ減こおこいこまこんこここ方ここせこ新へ
こあこれこれば小谷のここここ人信こすぎぬる

秋のすゑは彼岸よりまいりてあいうめまいりてせ
ちりはせうちの世うらしぬちぎりのとゝいまさらうゝと
ゝべらやたよいつるもあるよいあをもさんの世れしくいありそ
のうへうえゝふ家ふひまれしんをのゝあるれしとうを
てやひまゝつまゝきうゝておそうくへさふいゝれね
うくいうふくえゝりかあのゝうよのしさうゝぬちぎさ
つをはの世ゝてよひちびべゝゝてまぬうゝあゝりて酒宴
ゝゝめゝふびゝのく和をあをくゝまりて山はゝぎれ
ゝ井よゝゝづを山世のうゝれをゝゝひゝかりうれふ答れ
はゝく

さゝぬゝよゝうゝぬゝかゝゝもあの和りゝれをゝゝふ郭ゝふ
扨家ゝうゝげようゝちゝゝゝして

夜の和家ちゝふきあゝ武をゝ井のゝをゝ山ゝあゝゝあれ
中村文蔵秋八ひくくしきものゝて城のまゝりをけうゝわ
うちのこれるゝをゝをまあゝうる歌をふゝ方蔵ゝの下に
やゝふまつゝてさいゝの用ゝこのゝうゝ中のくゝきゝをゝれゝば答
のはゝ方ゝれゝぐゝち自宅ゝゝれ女房ゝうゝをゝを和ゝゝ文
蔵秋屋ゝうよ大ゝうけあゝゝゝりゝんあゝる時新人ゝうゝ和ゝ
扨家のゝゝわゝゝ文ゝまゝ人ゝよのゝりて上下十余人ゝゝふ扨
ゝりて用ゝ姫ゝゝ立のゝゝりゝうゝ和月写のゝりゝ

# 比賣鑑紀行卷第十一

## 紀行第十一目錄


衛宣文人　列女傳
解損亮妻　解孩孫條
陳孝妻　後漢月記
鄭之娘　解孩孫條
高士文寶士妻　後漢月記
竇子二女　唐書
諸氏女　古今列女傳
王烈女　解孩孫條

攻賀媛　月女紀
大和の国女　大和物語
選子内親王　女房記
源義親の二女　平家物語
赤心良臣の人

附新尼家つかへ　同上



# 日本鑑抄紀行巻第十一

## 紀行第十一　此巻に貴十八の君代来あり

いにしへの御乃宮夫人とのひろハ家侯の位にとゝまりたまひ
てゝ御のゝ宮にまうくすべきその給よりまたく
多くうくる給乃ゝ宮ふうしづきの女房ゝ
よいりのゝいてせんをうるもれば給えりあるべし
とゝ[illegible]ど夫人ゝ[illegible]てゝ給の君代給こゝ
まうとゝ世の振つとめさせのゝ位賜てゝ[illegible]給ゝ[illegible]
の君代給ゝとゝ世を法げせのひろぶりうすみ
ゝとゝんとおがりてゝ給ハ小ゝ君代給ハ[illegible]

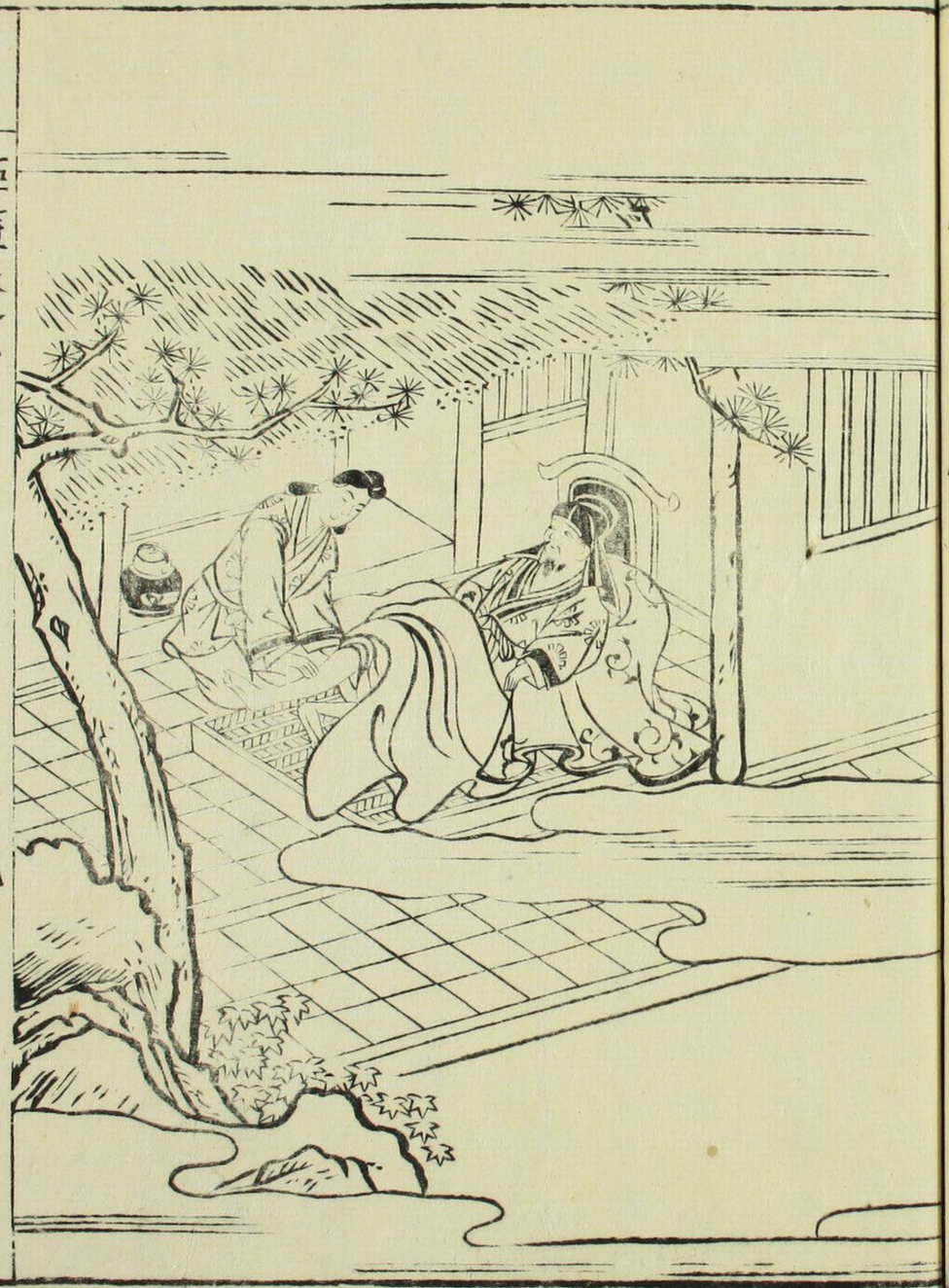
ぐるしく祈うくいむとりつ地しゆうぐやとりさわりとぐ
まえ人のゆうされさりかい宗のせうとうとうのうりはひ
してはるかげきゅうさんせのふさんど宗とわしも体のいす
の思れ和やとをおさるべきはるのあわと夫人よすめりさ
主けりよまえ人うくまりわてゆうさとび祖つてりてん
ざーとあうとをりそのせよりぶんうりあうどまつぐは
ぶううどうりんむーりうまねうどまくべうびとこんねさ
んまりうどさうべうれどうりぶんのさどうのうまはまりぶー
うけさりぐむーりうはうりべうれとをりぶんのなとをさ和
はまれうぐめられりぐと貞んのうとさ和をうぐうー信じ

あうりうりりは結もれるれ拾をうつうねさせまえ
明の解損亮が書い貞女すて学生胡廣ぐむとあるり
そのむまれつき貞んあうりのうとうどふうのあわうさうう
あーて和をあうれふんねうーちうめ損亮ぐうー解潔は
加廣と同学のうるうあわーて朝よはうへーー時も同じは
うううまめくりあうり時は富んのありうーみどのあいせざと
よ解潔はのうとまあり胡廣むとりとまりくせうとのへ
つまり加廣うこはりてはうりれーうあむーでりうーばへ
りくくうどもいはぐ男女をうとれーくはとうれば我うく
はるうれりがうどめてむとりあるりべーとのあひうりうその

はるこしてむとあるをうこれがちく無いとこ
ろこぶく成
吉野さとびろわすかるちち山貞女かわつるる湯をむと
ぶてあぐひよき月をまちとびろう赤よ解氏いわしぬつ
うをえてぞれば泉ぶぞりてをちくあぐされゆく貞女とも
ちきりをのへてつうこへりうひをせられば貞女これを
きてうるこまよこへぐうけこりりてそのこをきわうへ
くおぐうきまぐひてこいふうるるーつうとうひれ
ぐうぐ湯りそのるおーるぐむまあさにわも云の
はちこひよおて文のうけこまらせるうなりきこぬぐ
まてびちきりてい為ちぐわるあこふいまぐきこう



ありまりてきうぐひよ
ちうひうるかこせんこうあてうちすぐぬやこへくりちよ
解氏つこゆうされてあつこへわうればうちきりのすあな
ぐうぐけこうり貞女解氏よゆきてわれこそやまいてい
うとあよ巻ありちうとあれ徐氏やまひの家よ湯でナセ
あこあのきわうよ貞女そのあこひとこりてこぐこうよ
めうりみこうこのむこうりうをもうぐうこうやうよ
あくれこあーあり文の邪廣ハ孺若の及貴とあぐう
二ちよはくうるこぐこありうりよそのむこあるりて
うこ貞烈のこかこうるぞいくゆこーうまけう





明の陳義が書はその氏さこうゆゑびたそでめその四やく
縁をとくてひーまゆくいまごあひとるるもなりうけうう
ちよ陳義のふるくびあしそやまひをえてうり妻のちてん
うさるよりありひそしばゆごちをてちちうをちるん
とちるをむとあるさうるのこてんさをたびへさうりれを
又ちちくちゆたびてつねり夫四ちりねちりまよ陳義へ
方のけちちひいちりをちごてゆまちづくるりもやりりれど
ちちををちくちるまで書はをちるわなくてちちうはたゆちう
陳義こうゆちゆくいゆまでさやまひをえてつまるく
ちりちちふちものゆへその書ふちうねの義をれをふ一あり

ものこうにとまつのびてつきまくらふんのく手へてあつ
うれめるものを我ぞいふつをぬるまくさぐりた
ばくしぐわうこの方をすてぐやとひとりて乙そうに
紙帳とふ毒薬をのとあて張しくわ書をそのありさ
まをかのさくわうれんぐうるくこ方をあくれさうきにお
くれどおもひておもひつくの毒れあるものをりこの
こうりやうぬふとりふいてくれくしけうが法師
をくれまもりて手ぐろのやうひいんゆき書をとるく
てこるぐわうくわうまわしまわ潛をのちぐわうすおとをそ
てこ人のみとまうけおをはふをひてさうゆきうりおと



このこうろいさだうく書もわげるくまやうるりしあるわ
毒薬雲してこをわこふるまうをるぐどをりてこさえ
のさいこいをうあうう
明の郭之姫こふ貞女ハおされわしくれそのわや美世
顔をふものいひるつけをきけるぐ年はありをそひは
おこの世顔ぐ歌いくもちふれそわそのをこ姫ちや
をうわうんぬとなをとうふあひをうその縁をしをびえ
ひをて示をるはうされいをふ和をうて異氏のちをう
おりてされをわこ姫ハるぐまうきくれてをこをうわ
あくぬやをうひうぬてはやく物をもすあやうびん

ぞ世のうつさとちり　まなのこそ毎月八月ごとに
うへとるものかくてつねのよとうへはゆるしうさぬぞよむ
ねはたをりしうみぐさいまの人あまりうればそ
ばくちに猫をとらぐ業をもちてたぐやつまをなつ
はくりまもしまうふたりとそ　みよりのちは巡按使
ぞふぐ山水をとりてそのもとそ　浦うぐ感じて美学
をしー貞女ぐ名をわうしてその墓をもうし碑をさて
和をたうてぞとうひうの治のんはくはぐまのわ
をそとるんざれも夫のうあはまぬよものつもなる女子れ紡
まひううぐ白髪のをたをゆべりうをかをりう

ぐうし青年史されうまのあをわしはぐうんたまし
ハをうをのぐりてあのつちとりふうくを人うる
ぐまりてまあくりふうなの人のりうなんぐまあ
をくそけうまあうぐうの我りうあうし細常をを
ーんとをうあり
明の章文寛う書あたその氏をううぐ夫妻得うぐは
ぞていまぐその礼をうぐつまうし文家やまひな
ぐていまをうぐりをりぬあうりしひうれぐう
乃家はゆうをて形をうまりぐやをうく母をうひなげを
をりうはくゆうをつまをたぐあるぐうはひうんむ

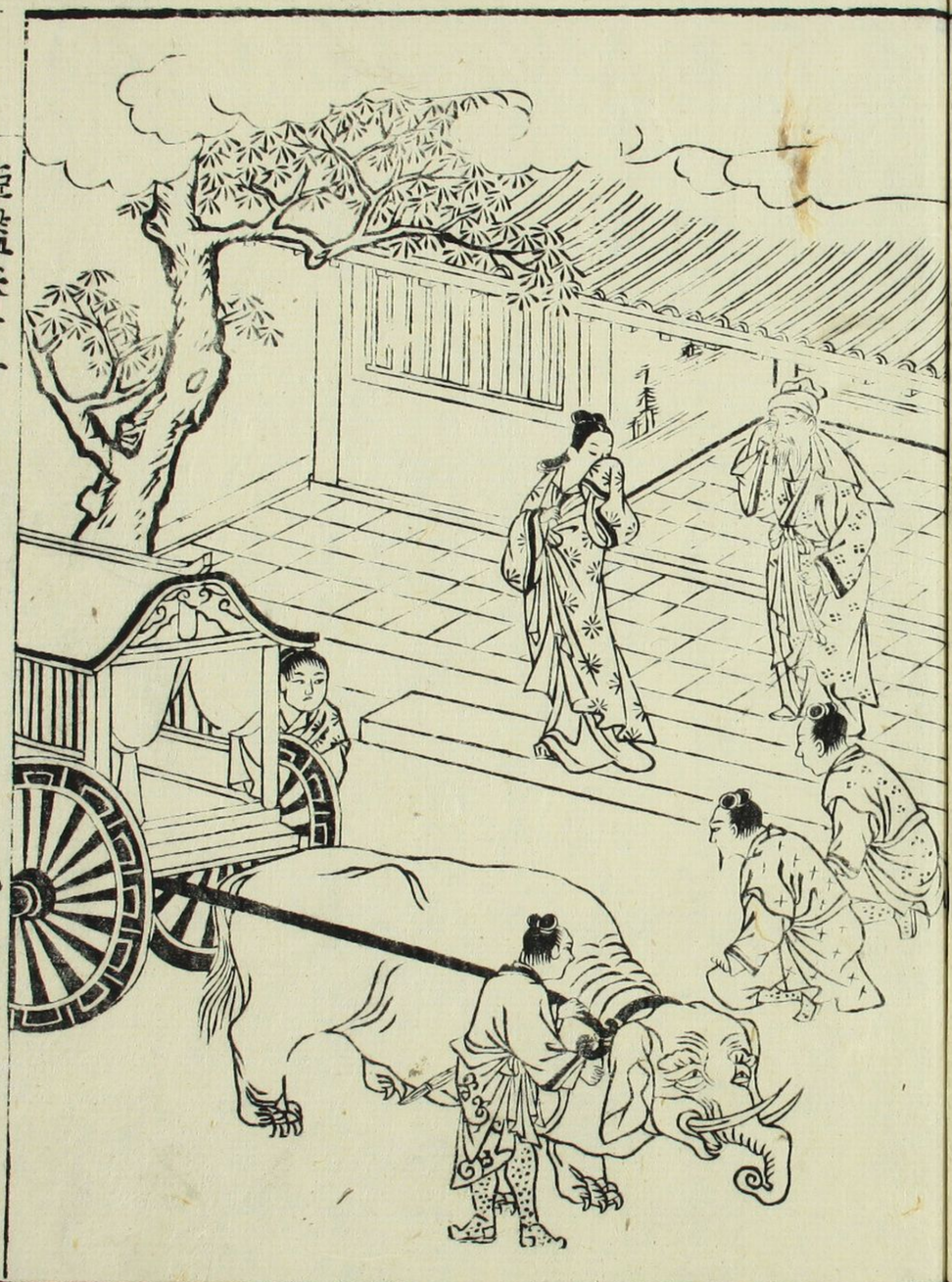
ちゝなくてはゝりやうもとめ韋氏まいてうりうとさは
ゝ宮さゝ一あゝてゝとゝさゝんよろうらでゝ久宮あゝり
けうが身もゝるゝどなりわぬいまあわゝしやりゝ山あ
ゝとゝふれゝゝ嫁礼奉をも稱んゝうゝふゝるゝろゝ
ものゝゝ高おのゝゝをゝうゝゝれば屋りゝいゝゝゝゝしべて
うゝづゝゝゝゝ

とのまいりてをくられける女房表よあづけ貞節の名を
ならはせるものの為に礼文をかくべし人をれば文をしりぬる
はずべきさぐりてその女房をもあまべ者をあの
振をきて女の家をゆきとつくしくとりこ月みて
くくふるねるようの振をあきをんれ者この記をもとれを
を女まの振をきてをくくひてをんかをもとりてのちに
ぬぐとんくくわ者をれバいまざはをきあさるを記を
きじその礼いよくうるべしまるれを女八一人を
をくうひくおくるを物るまべいまざをんてえぬ者をくるれ
どんんすべをゆきうをひぬこを者をとれてこを記を
よんくむるものをんをうくばかりをおもりてをくるのんば
ををくるも兵部のをさかいをばうーはをでをも礼をを
え節をををざてみるくくあやはくくのあるをひくば
なくんをふ者のつくるをれくるるべをゆをいをくく
よをくくるなり
唐の京兆府奉天の縣令賓氏のむををくくかを三人
なるあやしれをばれをば者をれ者をれわをざくくをに
おいあるをしを男なれをを記ををうくくわをれをつ
くーををくくををくくををもを世のつねをくをんくををを
をのくく温城世をくおうて粮をむをくばかのはをを

あさうどを男女紂宴をこわまをとめをこわねはむをめ
ねのをんを十九いりをとを十をんなわんをるをいをかわ
わをふをけりをこをうをふをれぬをわをれどぬをを人
をつあてをむをさわをさををうわいををすみゆをあをま
をくれをををへをんをきをまわをををををわをかをう
のををるをと一ををよわりをいをわぬゆをくををのををわう
あるるの若れをんををれバをわをものをしをあ我をあををを人を
ハをををされををををて峯のをを人をわ弟ををかをげをく配をを人
をくあをやをををらををぐはををををををひをわりををををしわをを
ををををををををををををををををををををををををををををををを

をををけわりをやをれ血をよ陽をれををををけををゆを人をふを
をををををいをををわをわをををををををををををををををををを
れをかををををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををををををを
をれが門同ををををををををををををををををををををををををを
なをををゆををををををををををををををををををををををををを
宋の貝列を鈴氏のむをををををををををををををををををををを
いををををををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををををををを

はるかれども王則そのいろをかへてこそ人あ
ゐそへとそうそうれとゐりしせうわ趙武とて四人ぐれ
べきたをしとらひそれど一まげたこよ色つきてひとを
うぐひすのくもをくしこひとりてげふるぐくら
きうとそげあらんとおもぐはをえつひとるべきやうふ
してむへのへとうひそれば王則ろこぐてその意り
をへしこわ意をもうこてもち分をとつるのをとわう
むを則ちまつさうひやとうとんとをおうまくまりのうる
すきゆをを王則ちてとぐりちろ地をそうねてうの
意ふひへうわひとめこぐかてさゆの人はとうれをて



武ちゝ母の御ぐしをかきなでゝ
ぬぎ置給へるこそびうへうなれ
すでにかわとゝいひそれば
是もしさわゝん時いかゝあるべし
しそれもんよりあるべやとはかりくいひまぎらし
くくとゝふべしといひすてゝたちくうれつゝ
うちのりてゆきさるゆくさきにまちとれよすこと
うさまあるべきそれば四よそぢばかりくやを
こんしうわ
明方赤染のこゝろ氏は恩女あり その親ひとりゆき



あくにあしくさわしがれおくゝ世をこゝろ生れ
かりわれば八よりもこゝろあのきけるを人はそゝ
まくゝ浄安といふ和の妻女れ家ようつとゝひしひとを
ゆくゝおくれしくあるまゝふ方のをとこふるあるざるこを
さこわいとゝるしくとひとづゝひくいるんとをんぜを
ゝのゝんのやうぬくなるこのゝ面れとゝゆりるこを
ゝめぐりゆく用はをとゝでいつゝるさけをゝはを
をなりゝれば髪あげ明ん方ざゝせすと人すあるれど
いをいてをくこゝびゝるあるゝどゝくゝをこゝるゝをあるひを
とくゝるさけをふゝあゆくゝをあゝゆりゝやうに

さるべくとしごろ世をもはぢんゆゑにかくしてのみあるべ
くもあれどあるはかりぬべきものもなれ人のあわきをうらめし
てさしかへりてはわが氏なりくその人はひろうの氏にも
とすぐれたるもののおもてはわりーがちて母のうらめしきはう
みわりてかうあはせてはわしるわさわとてうしろ
ぶかきをばけうあくにおもうざれどいまさびらく毎う
ひんくえんくかうぐはうれそうぐはうはてとくうふまでハ
つまなくてうはーされどかくるまよいくまろうにうらひ
をとそばけてかをぬきあえんかうとてうくわくく
あくてはずいくとくいくさわうれどもそわくごとく



てもかくしくなわふるりかをもうはゆうさふうしうれて
そのうぐねをあはくちくあてはどちくさ壇のを
とわうとはうふりかぐわのの貞女をきぐうしげわ
はうぐふるさけなうきとしあるぐいうとうぬわうわ
年色てのちは長氏なふぐしうふ官人淮安を
ようきわて岩ちうぐちぐはぐうけうはうまやう
ぐくあうう女一人をうかそのまへよあて祖をもて
どうはなはうはいうあう人ぐとうひうれば我が兄女れ
を氏をとて女蘭のぐうちまとひ女なわ友をとうれ
て二十をちうくゆうわのかれはうくぬまうもいう

と角八人ゑぼし直衣のうるさくまとはるるも
ものゝ者もしゝまきけわらんべどもの物をあらん
さまをみてまゝにたゞ異氏にてうちを
はらしあるやまひわやしとゝひぎとうけすかと
ありしかれば物をくさめて美なわるわあけの日そも
あるてゝへばさらつゞらうるあるゆわしとゝわ屋ぐて嬉
よよゆきてそのあとうつまろれば御ぐろはしぐとゝば
ゝるわひしろ中よ熱女ぐ溺あわろる異氏なりうぐて
りふ茅ろうきうしひまろしまわしうあて物をその雲れお
されとまきうる事のうしつぶさまうしひさして物ようわ

てのちはまのつさ物ぐしうしりふしみさうげて美中ど
みうぐをゆしくうぐでおぐりうればうのあよ熱女ぐはうを
あてうその新像ゑ令ぬの儀振をたうようわそのおさと
ゑおかせてまりよまうせうひうわ海ちのとたうう
いうく暖海記せハ大事なわ節義ハ養物うわ事ふ
のぐてうぐううちうぐもうるまうて学者士大まの
ううまをううとうれば月ごふ仁義うに礼法り
ゝうひゝを擬典よもううあうゝ内よハ
又兄ゝをゝへううゝあうの人隙なのゝまうゝをううれ
あうようわうりふおうのうゝをうなわうれどうく義と海り

て死をうらくすうちんなんと世よきれなりまれ王氏おそふさ
まりうれんの家よそぐらて日よそひふ王きそ家
ふるうさ仏るまようわんをうれとそのあ死そ思いさ花
うさそんげしんぐーつゆもうつさおるまあ夫ようを
あうなれ性のうでうきゆとはこうけとをうすぐれて
ふをんどもうまびとふ物まわ濡上の美れつあう彩
祝昊鯢ひもとなわ月日くりかてわをひ
くうぐ祇昊とわくをうを世のうごあうるぐいの
あうぐくくあさぐぶくくあとりふくうくうつうものま
仏ぐびとぐいつの性やあ武人雅四てくく凡人のあや



家ひくくあうまふぐ身のくあ氏あよゆくすふ
をうあおてやさあさむをあを極女の家ようそのあ
まて年ぐうそぐてあをれう女性よんづきあんと
きいうぐんすぐさぐそあん我これまくへていうあ由ど
まくなわてあをそぐうう力あれべをき鄙人をぐへ
むまうくけぐあようをとのあさひぐふうをまをえ
世ですううものあり二うのうとをうぐ新のふくうう
ちうさそのむぐうなう時よ記きあてくうう新の
男美ゆうなりされとうひのをけうへ死をれい死
すうぐうなうを性ちる人をの記うひて面まの

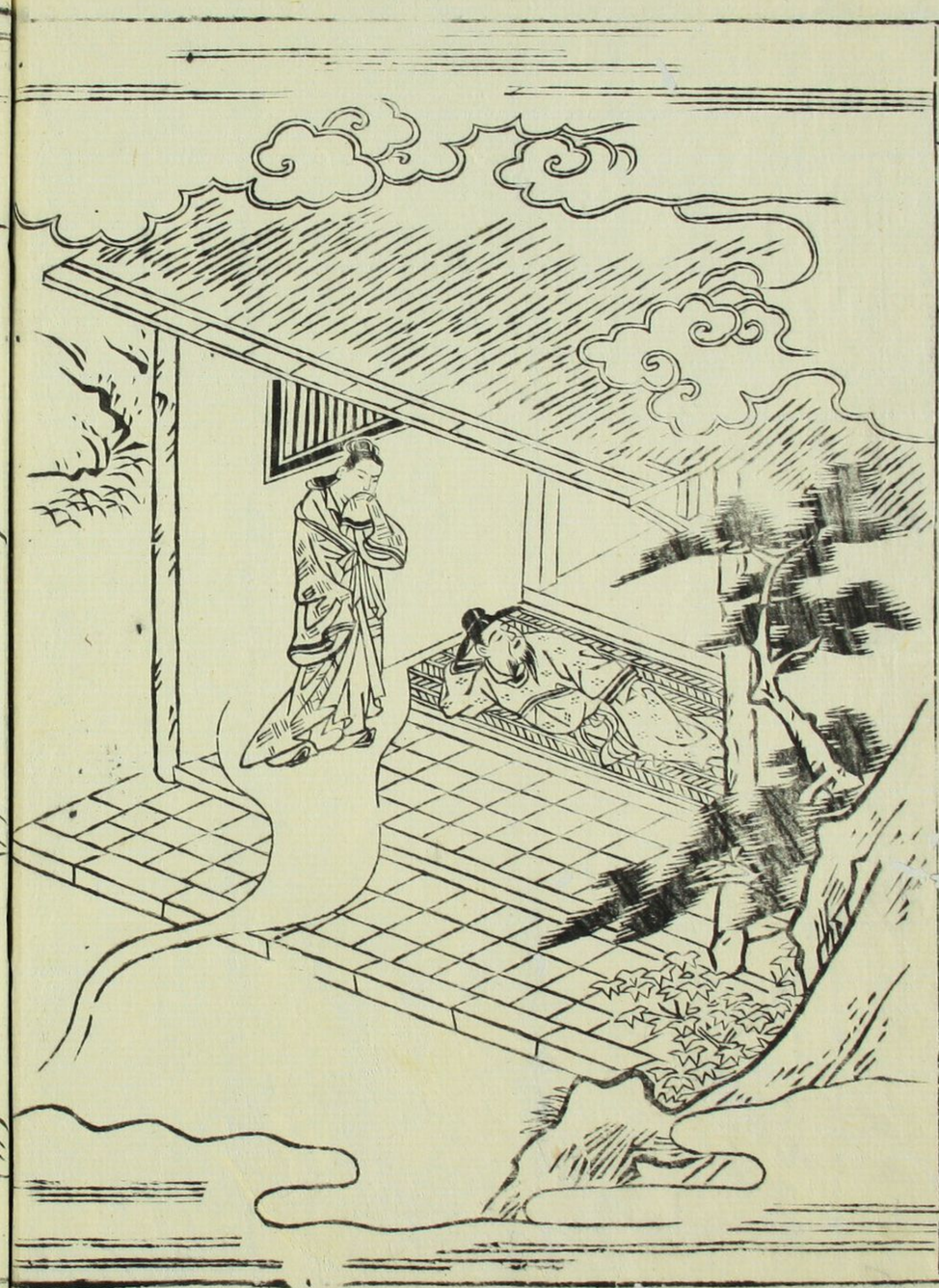
そのうへべ一さびあるかぎりれて角へいるとも言はて
うつふせの新のんぐしへはなしもいへ前のうりてはなしひ
まとつうりもおそまりまとうこてかくかぎくあるか新
あるたのつまはあるぐれはるのまさ者の巻まなつむべう
らとさきうひとわてやーまふとものも魚をあんとうひとさき
てうふ人とまつかどのんそそんの巻てうのあるぐれべかー
比の巻ひはむしひ人やとうべきありわるとへでもぐ
んとそのあーまはとうんへ角のぐりあたるかうさう
むはあらうんものへあるたのうえわうびてたを
るとまわるのうはのぐきて体とうづりあるへうて

新のうあはあるべしとひうはなはは信とうてもと
でふさうたりもあわつるはうとうわぬ
うぐるはむしー童田の孫が嫁とうひけうへ化粧て皇乃
文人なりそのうちうてくて情のいうはーみどは
嫁はいとあるくおげはつうさうぐど皇后無乃嫁の出地れ
みうしうるくおうーはゆけうあはよむるーくうちすぐれ
せるのふあうとたちくうさうてうへくのまへは孫が嫁とあ
ーいぐされて我こまとはぐうぐきわるくとへぐも后のう
まうてれくんはゆうせゆびさうとてづうはさう
うあんうもなぐうーくおかとて

ゑれうこふおもこのおもめあとをれやしまうんと袖をさを
のひろれば揚屋遣迷給ふのふんすゝ名て
みをしりわけるやもちひとうやとうやとも
あまやしまうんこれをしばらくまりてしばらくをれば
屋へ迷給ふびてをわあるひの西よりて迷給ふの
格のりふゆををれどをこびて迷給ふて性四ゝら
こづきをれどもあまこどをあがてをくをよすてゝをを
いをせをゝをふ幸をしびんさをどこびんまを
えあんをゝをやあまをゝて世をゆくゝ給ふあをを
なををゝひをいをすをまえをふまがく給をををつ西屋



らげをいをるみをがをををゝめをゝをゝをゝをあをゆへを
をををくをいをあをゝて記あををゝ迷給ふあひをへて丹
波のをよ楽四のゆをををへおをゝをれをををよをををてひあ
をふけをよ為ゆをあぬをあをとををよ歌笑墓あをを
いひををへあを
むを大和のむをあををへのむをあいををををををあを
ひをを京をあをあをををれをををいゆをみてがををまをとれを
ををがをあをををををびぬをををてをををををを



[illegible]

[illegible]

[illegible]

とりひろう女房よ　ものびくあり　ひろいとる　れば　かよ
いどしあへどいひはなれば女
　　　

よしづくりとれているあるうえにあとてうつうあとこ
うしあ又のけ名をもまづ
いうまゝやうゑまげ我をうあ
あわれいは敬ゐいとはかくし
てこそまいりくへとゆくれば
をはくをやりけよむひてを仏せうれけりとゐ
こうりまゐまてうぶてあげてうるあまびいうふきわ
こうまてさぐうりかきあくを
こさわあわまこ和又は前とうをとすいうまてはよ
乃長者がむをあ延あうくふむまれくわ第那をを

おうくこ紀左帝悪源を義平はこあくうれは帝
ゆこあ大夫弟長こうを左を清盛彩和はつきこうをひを
ゐがようあうをはくこうあくこうあひ朝長はいさば
あひくれはを墓のをぐのくふくを自宮をとうくあい
それわ尾法のふりをいわを四方を家ぐこあう
くくをあそれくちを家の結源平を清盛家をふ
をのあ法の実ぐふうをを彩和をはけぐりを墓をは
て弟長が墓をあぐこくこうびくりて於くわてゆきぬ
はあを十二ふなわけるぐそのあわこまをうんて我
を張厩乃をあれぐ女なわをもつあはうをたを

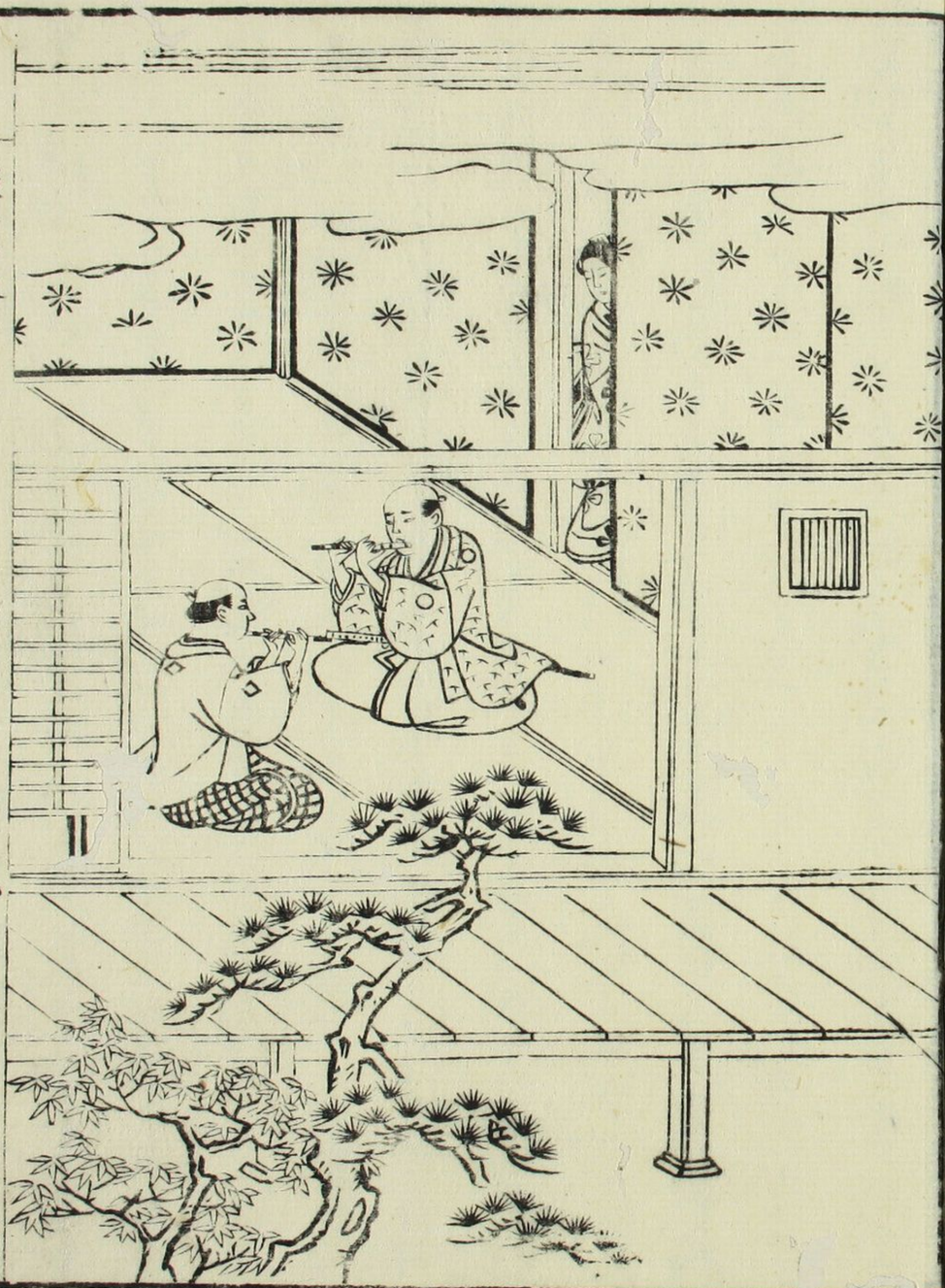
けうらにぞ見えわたりける
つまとてもおぼえたるなりとぞ
母をはらくくるまぐさめてとぐめをさかりすぎぬまで
さわりとそれをんをゆるべるべきなりあるべきことわとのび
おくけるようにあるこるる様にぬぐりはきて
身をかがめてうせたるそちわあくれもれもの玉はきるに
女もでもんのうしをあげきあくれまきれ人い
なりわるを
永源の法橋ようすをけるぶらたに資成ふんん
内侍わりうしら世をよさくれんざはうひぐくしくんの



たうをんをせをゆとうくうにさしもし女房なりはんのたる
紅のあれ景は貞光久人朝臣ふ帝の上ものわり
けるようしひて後ろひるるぐきこうあるれでしあぐ
ひようちとけく内かなくいわうとりぬあるうと紀貫
光ふうこふきて左をが妹とうんそあくりかざりおくあ
で御ぐしひて左をようひるるいそこの妹と我ようえさせ
ようれをこれちをおくてひんと世をうぐりようすむ
屋ことのひられば左をのりひをうるをうけあるる
をのれりこの法方第ふわるのへうぐ妹まいうすべと
いさうるものたようぐまてうるるんだうえてとは御

くれと事わりひくらちとうひつすぎぬ貞光をいう
おりて山女房をとらやとんうをそいよくたとゞ
ゆくうひてるまめこまてわそさんどたそい
さりげなくよてわ紙をすゝ巻ひて陣中の礼と
たゞへどまをうわゞくよたをその母まひてわて
様と聖村紙中るこふをんよつひゞ巻わその比義
脇の軍い織田信長とけあてゝまて山家中ゆる
よおりけるゞ永禄十二年のをこぬゞ脇書ゝ系よいわ
て本国るをむの軍ゞこのたくものあをゞこうひを
巻中こたをいよをてのゆよあわるゞよをて年まけ

てちりくよあらゆうさろう時よたを寄れりてよ
き武ん〳〵こくこちらてあくゞをくをこれいこつ巻
毛初こくこちるまけいくさあまべばゞいてくく
巻もうあゞと東巻のくをさしてわくそろを貞光この
くくよおのひわりをえくたををくゞやふりひを
巻べあひんけてあ巻いたをろくくまくもあゞふうへを
とふよわていくをひけぬ鎖あゞこうへあくをて
たくろんとをる赤ろう武ん十猪ゞろわ貞光よつゞくて
あひくこる中ちわあけるを巻すてたををあくをろわ
貞光をんをるまてこべをまゞたをあ巻









ふわうこうひろう刀わかく貞光ゑのざをみがれくひきまつり
ぞく分の武ゐいでまりてつねよりたをもがくびをわぬと
まをとけう人貞光ざまうざ人あるぬふうまひうあと
これはさうこうしてあざうわかくうわされど貞光
ぶざうしと思へうまをしてあるあくてたをが伏見の歌う
わしてみうの女房をうごひうわてうへりかくこうなりふ
海のうちよへまをこうわ女房ハ中りくふ武士のふうむ海
しきんざしわうよりはさしぬ兄のくに分まだ身とと
でこうまをこうさうやとうひうこうあうわされこあまをした
いざうこうの歌よりちつこうて貞光ようひけうりうれこの

[illegible]紙をとりあつめて[illegible]
をれば[illegible]
[illegible]
[illegible]

そのうらぶれてこづゝもとゝかの女の
はゝとまるらくあまれるもとゝ貞心（こらしんゆうこう）たゞ
ゑすくるさんとうくらべこづゝもあり法るもとなげきし
まうざゝ者のかうわさはよ作長ぶるもとゝまのへしゆう
ふ義不化の貞者のあとあ母のいましめよきてゝ
の者（さう）あるどもとゝうもよせゝまるゝやゝ

法華驗記抄巻第十一 終